

話題アラカルト

全国高等学校ビブリオバトル県大会レポート

全国高等学校ビブリオバトル
沖縄県大会実行委員会

■はじめに

2024年12月15日(日)、沖縄県立図書館にて、「全国高等学校ビブリオバトル沖縄県大会2024」が開催されました。

本大会は昨年度までは、沖縄県高等学校文化連盟(以下、県高文連)が主催していましたが、様々な事情により、大会の継続が困難となったことから、県内の図書館関係者が実行委員会をつくり、大会運営を引き継ぐことになりました。

実行委員長を琉球大学教育学部の望月道浩が務め、沖縄国際大学司書課程担当の山口真也が事務局を担当、さらに、沖縄県教育委員会から図書館教育を担当している知念秀明氏、沖縄県立図書館企画・支援班から川満ひろみ氏、仲尾涼子氏、沖縄国際大学司書課程の名城邦孝氏が委員として加わりました。また、沖縄県立図書館の神里茉里氏や調査・サービス班の奉仕員の皆様にも会場の飾りつけや当日の運営のご協力いただきました。

実行委員会形式での初の開催を記念して、大会当日の様子を中心にトピックごとに活動内容を報告します。

■申込者が13校、19名に!

県高文連からいただいた資料によると、昨年度までの大会の参加人数は少ない時は10名未満ということもあったようです。県大会として成立するためには、最低でも2校、3名以上の参加が必要となります。大会の運営方法が最終的に

決定した時期が9月末ということもあり、広報を開始できた時期も遅くなつたことから、大会運営を引き継ぐ上で、実行委員会がもっとも懸念していたことは参加者が一定数確保できるか?、ということでした。

しかし、広報が始まると、徐々に申込が増加し、最終的には13校から19名のエントリーがありました。

広報にあたっては、県教育委員会の連絡システムを使って、知念氏から県内の各高校へ開催要項を送信し、各学校へ参加の呼びかけをしていただいたことが各学校からの多数のエントリーにつながったように思います。



12.15 SUN

■主催 全国高等学校ビブリオバトル沖縄県大会実行委員会
■共催 沖縄県立図書館
■会場 沖縄県立図書館
■会期 2024年12月15日(日) 14:00~16:00 (13:30開場)

全国高等学校ビブリオバトル沖縄県大会2024参加者募集!

申し込みQRコード

QRコード

QRコード

QRコード

QRコード

QRコード

QRコード

また、本大会の優勝者が進出できる「全国高等学校ビブリオバトル決勝大会」の今年度のキービジュアルとなっている、ざしきわらし氏のイラストをもとに県立図書館の仲尾氏がデザインしたポスター(前ページ図)の完成度の高さも、高校生の参加意欲を高めたように思います。このポスターは県立図書館内に掲示するとともに、開催要項とともに各学校へデータで送付し、各学校の図書館などで掲示をしていただきました。

なお、開催要項には申込の締め切り日を記載していましたが、ポスターには記載がなかったことから、一部混乱が生じてしまったことをこの場を借りてお詫び申し上げます。

■予選会は「ワークショップ型」で開催!

1校当たりのエントリーが多かった学校には校内での予選などをお願いし、最終的には12校から16名の本申込がありました(当日欠席1名あり)。予想外のエントリーの多さに喜びつつも、当初の予定時間2時間(14時~16時)に収めるために開催方法を改めて検討する必要が出てきました。

数回のメール会議を通して、5~6人程度のグループでの予選を3組同時開催し、予選のチャンプ本を紹介した参加者3名による決選を行う、ことを決定しました。また、予選の開催方法としては、ビブリオバトルの開催方法としてよく知られている「イベント型」ではなく、「ワークショップ型」(コミュニティ型)を採用することにしました。

この方式は、ビブリオバトルの考案者である立命館大学教授・谷口忠大氏が、学生時代に最初にビブリオバトルに取り組んだ方法とされていて¹、大きな会場で行うイベント型とは異なる楽しみがあるとされています。参加者同士お互いの顔を見ながら、机を組み合わせてアットホームな雰囲気の中でリラックスして本を紹介し合う、そうしたビブリオバトルの原点としての楽しみ方味わえ

るようこの方式を取り入れることにしました。

県立図書館の協力もあり、当初、予約していた会場(4F ビジネスルーム)以外にも、3F エントランスホール、3F 子どもの読書活動推進研究室の2か所の会場を追加で確保でき、大会当日はそれぞれの会場で開会行事が同時に進行できるよう、実行委員長挨拶、ルール説明を動画として上映したことと、5人ずつの予選をスムーズに開催することができました。

予選会場の一つとなった3F エントランスホールは図書館の入り口に近いオープンスペースとなっており、ほかの会場よりも人の往来が多く、運営上の不安もありましたが、参加者は他の会場にはない緊張感を楽しみながら取り組んでくれたように思います。



▲3F エントランスホールでの予選の様子



▲3F 子どもの読書活動推進研究室での予選の様子

¹ 谷口忠大『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲー

ム』(文春新書), 文芸春秋, 2013



▲4F ビジネスルームでの予選の様子

■決選の様子——今年度のチャンプ本は？

本大会の開催日となった「12月15日」は、沖縄県立図書館が2018年にリニューアル移転した記念日ということもあってか、来館者も多く、予選3会場ともたくさんの方々にご観覧いただきました。予選での接戦を勝ち抜いた3名の代表による決選の会場にも、会場に入りきらないくらいの来場があり、予選・決選の延べ人数で130名を超える方々の参加がありました。たくさんのご来場に心から感謝申し上げます。

3人の代表者による決選を制して、見事チャンプ本となったのは、県立首里高等学校3年生の神里尚弥さんが紹介した『何者』(朝井リョウ著)でした。準チャンプ本は、宮古高等学校2年生のヌジュヤスミナルリファティマさんが紹介した『アルケミスト 夢を旅した少年』(パウロ・コエーリョ著)、辺土名高等学校1年生の高村貫太さんが紹介した『四畳半神話大系』(森見登美彦著)となりました。

県大会の優勝者は全国大会への出場権を得ることができます。全国47都道府県の代表による全国大会もこれまでに10回開催されていますが、2022年1月に開催された第8回全国大会では、沖縄県代表の小松美幸(当時は小禄高校3年生)さんが全国1位、グランドチャンプに輝いています²。

² 「Gチャンプ本に沖縄代表小禄高・小松さんの「夏と花火と私の死体—読売新聞教育ネットワーク」



▲決選会場の様子

本大会の開催を知った小松さんがアルバイトの後、会場に駆けつけてくれて、以下のような素敵なメッセージを届けてくれました。

「今日は予選、決選とたくさん本を知ることができたと思います。私も全国大会でたくさんの本と出会いましたし、佐賀県の代表の子と仲良くなって、今もやり取りが続いています。ビブリオバトルにはたくさんの本と人との出会いがつまっています。1年生、2年生の皆さんにはぜひ来年もこの大会にチャレンジしてください」

小松さんのメッセージにもあった通り、本大会では、決選に進出した3冊以外にも、『すばらしい新世界』(オルダス・ハクスリー著)、『とわの庭』(小川糸著)、『15歳のテロリスト』(松村涼哉著)、『妖怪アパートの幽雅な日常』(香月日輪著)、『世界一美味しい手抜きごはん最速! やる気のいらない100レシピ』(はらぺこグリズリー著)、『図解モチベーション大百科』(池田貴将著)、『ふる本屋』(日向理恵子著)、『私の家では何も起こらない』(恩田陸著)、『冬の朝、そっと担任を突き落とす』(白河三兎著)、『告白予行練習 大嫌いなはずだった。』(香坂茉里著)、『母性』(湊かなえ著)といった、小説、ノンフィクション、料理本など、たくさんの本との出会いがありました。

決選会場の後方には、県立図書館の調査・サービス班の奉仕員の皆さまが、発表者が紹介した本をすぐに手に取れるように展示コーナーを作ってくださいました。未所蔵図書や貸出中の図書には紹介カードもしていただき、予約やリクエストができることも案内されていました。終了後、この展示コーナーの周辺で、本を挟んで様々な年代の方々が交流したり、発表者へ感想を伝えたりする場面が見られ、ビブリオバトルの、「人を通して本を知る 本を通して人を知る」というコンセプトが十分に發揮された大会になったように思います。心のこもった素敵なコーナーを作ってくださった県立図書館の皆様に心からお礼申し上げます。



▲決選会場後方の展示コーナー

■ボランティア学生が感じたこと

本大会は、実行委員以外にも、会場の設営、飾りつけ、受付や会場間の誘導、予選・決選での集票作業など、沖縄国際大学図書館の司書課程で学ぶ大学生 12名がボランティア(学生委員)として参加してくれました。終了後に感想を聞いたところ、次のようなコメントが寄せられました。

「ディスカッションタイムで手が上がらなかった場合に、学生委員が発言して質問を促してほしいと事前に頼まれていましたが、「その本を手に取ったきっかけは?」「どの主人公が好きですか?」など、発表者同士でどんどん質問が飛び交って、私たち大学生の出番はいい意味であまりありませんでした。ビブリオバトルは、舞台でプレゼンをするイベント型のイメージがありましたらが、今回の予選のような、机を囲んで、発表者同士が近い距離で、おしゃべりをするように取り組む「ワークショップ型」があると

いうことを今回の大会で初めて知りました。ワークショップ型のアットホームな雰囲気がそのまま質問のしやすさにもつながっていたように思います。私もぜひビブリオバトルをやってみたいなと思いました。」

「私はA会場の予選を見学していたのですが、決選に進んだ生徒さんのプレゼンが予選とは全然違っていて驚かされました。予選では最後の方で話していたことを、決選では最初の方に話していく、緊張して順番を間違えたのかな?、と思っていたのですが、全体的に新しい構成になっていて、予選での反省点をふまえて、短い休憩時間に再構築して決選にのぞんでいたことが分かりました。県大会のチャンプ本となった『何者』は未読だったので、帰りに書店に寄って購入しました。この日は県内の書店で何冊も、高校生が紹介した本が売れたのではないかなど思います。」

■全国大会主催者からのメッセージ

本大会の開催にあたっては、高校生全国高等学校ビブリオバトル決勝大会の主催団体である、活字文化推進会議の和田浩二氏からたくさんのご助言やサポートをいただきました。和田氏は大会開催前にも来沖くださり、沖縄大会の継続への熱い思いを持って、実行委員会の立ち上げにも加わっていただきました。また、申込期間中には県大会常連校への呼びかけを行っていただいたり、大会当日にも再度ご来沖くださり、予選会場の進行役として大会を大いに盛り上げてくれ

ださいました。和田氏のサポートがなければ、沖縄県での高校生ビブリオバトルの火が潰えていたかもしれません。

県大会終了後に、和田さんからメッセージをいただきましたので、実行委員会形式で再スタートを切ることになった「全国高等学校ビブリオバトル沖縄県大会」のレポートのまとめとして、最後にご紹介します。

「活字文化推進会議事務局の和田です。上記で身に余るお言葉をいただきました。しかし、私はほんの小さな種をまいたにすぎません。実行委員会の皆様、高校生バトラー、本当にありがとうございました。沖縄の高校生たちが愛読書を語る姿はキラキラと輝いていました。読書に关心のない高校生たちにも見てほしい「景色」です。沖縄のビブリオバトルの輪がどんどん大きくなっていくことを期待しています。」



▲参加してくれた15名のバトラーのみなさん

(文責:山口真也・望月道浩)